類型学研究（2005），*117–130*

詩集『主の年』の成立とその後景

木下 晴世

Ⅰ．証言と史料

「いかなる悲劇的事件のあとの隔離 seclusion after the “tragic events” もなかった。詩は至るところで発表され、本が出た。私は「芸術の館」と「作家の家」のメンバーになった。逆にまさにそのとき私は登場した（朗読、雑誌、作品集）。Vl. Kaz. シレイコと別れたのだ。というのは悪魔のような嫉妬にとり憑かれて彼は私をどこへも出さなかったからだ。**一九二一年春**には永遠に彼を捨て、秋に詩集『主の年』*Anno Domini* となる大きな詩群を書き上げた<…>」（アフマートヴァ『手帳』1996 Moskva-Torino, pp.625-626）。

「一九二一年**八月二十四日**付ペトログラートチェカー常任委員会議事録抜粋。グミリョーフ、ニコライ・ステパノヴィチ、元貴族、文学研究者、「世界文学」出版局員、既婚、非党員、元士官、ペトログラート戦闘的反革命組織の加担者。反革命的内容の宣伝ビラの作成に積極的に協力し、反革命的蜂起の際、積極的参加が期待できるインテリゲンチヤや幹部士官グループを組織に連携させると約束して、印刷機の購入資金を組織から受けとった。

極刑－銃殺に処する」（『アガニョーク』1990 No.18, p.16）。

一九二一年**九月一日**付『ペトログラーツカヤ プラウダ』181 号。「反ソヴェト政権の陰謀発覚について」（全露チェカー発表）と題する記事で「積極的陰謀加担者」として銃殺された六十一名のリストの 31 番目に N.S. グミリョーフの名があるという（V. チェルヌィフ『アンナ・アフマートヴァの生涯と創作年譜』Ⅱ 1998 Moskva, p.32）。

「一九二一年キターエヴァ荘の向かい。半ば病院、半ばサナトリウム（バルコニーつきの部屋の二階）。八月から九月まで。そこで**九月一日**に N. グミリョーフの死を知って *Anno Domini* を書いた」（『手帳』p.586）。

「追悼祈祷（パニヒダ）がネフスキィの小礼拝堂で行われた。ニコライステパノヴィチの弔いの時刻はすれ違いざまに囁き声で信頼できる友人たちに伝えられたが、それでも礼拝堂は

人々で一杯だった。<…>一週間後 [**九月九日**] にカザンスキィ寺院で追悼祈祷が行われた。「殺された神のしもべニコライ」の祈祷が執り行われた。だれの弔いか皆が知っていたわけではなかった。当時「殺された者」は多くいた。」(オレスト・ヴィソツキィ『息子の見たニコライグミリョーフ』2004 Moskva, p.298)

『空想家の手記』一九二一年四号（**九月**）に五編の詩を発表（「恐怖は闇で事物を探りながら」「塀の下で倒れ」「どうやらやっと別れられた」「あなたは思っていた 私も同じだと」「愛しい旅人よ あなたは遠い」)。最初の詩の日付は後代の作品リストで一九二一年八月二十五日、『時の疾走』の手稿では二十七日－二十八日。のちに『主の年』初版に入る。『主の年一九二一年』初版、一九二一年**十一月十五日**に出版契約、**十二月一日**に発行、翌年の**一九二二年十月**にベルリンで第二版『主の年』発行。

「すべてこうした売れっ子ぶり prospérité はモスクワ行き（一九二四年四月）で終った。「『現代ロシア人』のゆうべ」で「新年のバラード」を朗読し、それから党中央委員会決定によって一九三九年まで印刷発表を差し止められたのである。」(『手帳』p.146)。

II．虚構の日付と構成

『主の年一九二一年』(初版）はグミリョーフの死を契機として十篇余りの詩が一気呵成に綴られ、それらの詩を母胎として詩集が編まれて三ヵ月後に出版された。表題が示す通り、この詩集の中心にはグミリョーフの死がある。

しかし反革命活動のために銃殺された「詩人」を追悼する詩の発表が許されるはずもなく、ましてや詩集の出版など、考えるべくもなかった。

これを可能にしたのは、見せかけの構成とうそのあるいは曖昧な制作年代、即ちジルムンスキィの言う「虚構の日付」(詩人文庫版詩集解説、p.447)、あるいは名宛人の書き換えによって、真実を隠しながら表現するという詩人の手法である。これによって詩(群）は二重の意味を担い、別の解釈をゆるすことになる。例えば一九四十年の『六つの書』で『ロザリオ』のエピグラフとなったバラトゥインスキィの詩句で推察できるように（「さようなら永遠に けれど／二人の罪びとの／一人の名も見つかるまい／私の詩句でも愛の伝説でも」)、デビュー当時は恐らく詮索好きな読者から私生活を隠して自己を守るための便法であったものが、この詩集では公に語ることが許されない真実を表現するための巧妙な偽装として使われている。晩年に至ってこれは独自の詩的手法として『主人公のいない詩』で発展させられ、一層複雑な構造をもつことになる。

III.『主の年一九二一年』

初版第一部の「主の年一九二一年」は表題に違わず十四篇の詩の全てに「一九二一年」という制作年代が記されている。しかしそれらの具体的名宛人は「N. ルィコヴァ」や「O.A.G.S.」とイニシャルで記された献辞、「スモレンスク墓地」で追悼される「アレクサンドル」という名によって示されているだけで、日付も「六月二十二日」と二番目の詩にしか記されていない。

詩集の冒頭には革命後の廃墟に新時代の到来を予感する「何もかも略奪され売り渡され裏切られ（N. ルィコヴァに)」(6月—以下、アラビア数字で示した制作年代や日付は詩集でなく手稿や後代の作品リストに記されたものである。*K. H.*) がおかれている。

それから幽閉生活の嘆き「愛しい旅人よ あなたは遠い（N. ルィコヴァに)」(「六月二十二日」)、夫への禁欲的勤めぶり「仕えようあなたに 忠実な勤めで」(7月)、誘惑「逢えはしないの 私たち別の陣営だから」(6月)、眠られぬ夜の戦慄「恐怖は闇で事物を探りながら」(8/25, 27-28)、夫の背信と息苦しい愛「おお明日のない暮し！」(8/29)、解放の喜び「どうやらやっと別れられた」(8/29)、永別の誓い「あなたは思っていた私も同じだと」(7月)、裏切った夫・恋人への愁訴「もう一度オルガンの声が響きけばよい」(8月)、別れたあとの孤独と平安「鉄の柵／松のベッド」(8/27) などがつづられ、ブロークを追悼する「スモレンスク墓地の今日の主人公」(旧暦 7/28 新暦 8/10) と女優スデイキナに捧げられた「予言すれば痛ましげに両手を下ろし（O.A.G.S. に)」(8/27)、破滅の到来を恐れて恋人に愛を知らせまいとする「私は愛しい者らに破滅を招き」(10月) がきて、亡き夫に愛を語る甘い言葉とその嘘を知る夫の応え「執拗なあなたの眼差で悩ませられ」(9/25) で終る。

このように「主の年一九二一年」と題する詩群では、一九二一年の夏、来るべき時代を迎える予感のなかで息苦しい結婚生活や夫との軋轢、夜の戦慄、解放の喜びと孤独が綴られ、詩人アレクサンドル・ブロークを追悼し、晩年の叙事詩で詩人の分身となる女優オリガ・スデイキナを描いて、最後に、亡き夫との対話で終っているかにみえる。

つまりこの「夫」がだれであろうと、詩人の生涯の具体的細部を知らない一般読者にも一つの物語として読めるように、詩群は構成されていると言える。

しかしここに現れる「夫」は一人ではない。書かれた年代と内容からみて大部分は二番目の夫でアッシリア学者のヴラディミル・シレイコだが、最後の詩に登場するのは最初の「夫」で亡くなった詩人ニコライ・グミリョーフである。それが分るのは、後代の詩集や作品リストに記された日付と詩の内容を同時代の回想や史料で知られている伝

記的事実と照らし合せてのことである。

眠られぬ夜の戦慄を綴った詩の日付が、後代の自筆の作品リストで「八月二十五日」、『時の疾走』（一九六五年）の手稿では「二十七日－二十八日」と記されていることから、その戦慄は、八月三日に逮捕され、二十五日に銃殺されたグミリョーフの運命への恐怖であると理解される。後で述べるが、作者はどうやらこのとき彼の銃殺を知っていたようである。そのひと月後の「九月二十五日」（一九四五－一九四六年にN. L. ディラクトルスカヤがタイプ印刷した詩集の日付）に書かれた詩は、旧約聖書に託して語られた愛のことばを嘘と見抜いて夫が応えるというもので、内容からみて亡き夫を偲んで書かれている。八月と九月のグミリョーフが処刑されたのと同じ日の「二十五日」に詩を書いてその中の一篇で詩集初版の第一部を締め括り、日付は勿論、年代を記すことさえ多くはない作者が全ての詩に「一九二一年」と記しているのは、そこに明確な意図が働いており、この詩集がグミリョーフを追悼するために作られたことを示している。

続く第二部の「記憶の声」は、詩人の全創作を支える主題の一つとなったキエフの聖ソフィア教会を題材とする「大きく門が開かれ」（「一九二一年」1915-1921 9/15）ではじまる（R. ティメンチク「神の叡智の聖堂」*Slavica Hierosolymitana*, vol.5-6, pp.297-317）。

それからある夏の日の出来事「黒ずんで歪んだ丸木橋」（1916夏）、出征する戦士と見送る乙女「あの八月 煙から漏れる」（1915）、首都から逃れる皇帝との「邂逅」（「一九一九年」冬）、夫の戦死「あなたは生き残らず」（「一九一四年」旧暦8/16、新暦8/29）、父を待つ母と子の「子守唄」(1915)、死者の赦しと迫り来る死の予感「塀の下で倒れ」（「一九二一年」6/16-8/30）、天国の死者への愛の誓いと祈り「白い天国の入口で」（「一九二一年」7/28）、亡き夫を悼んでやまぬ寡婦の悲しみ「泣きぬれた秋は黒い喪服につつまれた」（「一九二一年」9/15）、革命前夜の罪深い暮し「誘惑はなかった 誘惑はしじまにすまい」（1917 1月）と聖ソフィア教会への悔恨の誓い「黒い畝の世話をしよう」（1916夏）、「あなたは私に約束されてなんかいない 現実にも神にも」（「一九一五年」）、青春の詩的回想（「貴い故郷の林と／ミューズが哀しみにくれ悩む家を捨て」、「日暮れて昏い紺青の空」(1914-1916)）が語られ、最後に、監獄のような結婚生活を回想しながら感謝とともに別れ告げる「あなたに従えですって 気でも違ったの！」（「一九二一年」8月）で締め括られている。

この第二部に収められた詩にも具体的人物名や日付はなく、始めと終りの二篇と中ほどの三篇に「一九二一年」、また別の三篇には「一九二十年」「一九一四年」「一九一

五年」と年代のみ記されている。ここでは夫の出征と戦死、革命直後の邂逅、残された母と子、懐かしい死者との語らい、寡婦の悲しみ、革命前夜の罪深い暮しと悔恨、聖ソフィア教会への誓いが語られ、大戦前後から革命までを振返りながら、死者を哀惜し、過去を悔いて、最後に、寄る辺ない自分を迎え入れてくれた夫への感謝と別れの言葉で詩群「記憶の声」は終っている。

しかし戦場での死が綴られているはずの「あなたは生き残らず」という詩に記された「一九一四年」という年代は嘘で本当の日付は一九二一年八月十六日（恐らく旧暦）」（ディラクトルスカヤのタイプ版詩集）、即ち新暦八月二十九日であって、これはグミリョーフの処刑の直後である。またこの詩の「二十八の銃剣傷と／鉄砲傷五つ」という二行に記された「二、八、五」という数字は「八月二十五日」、つまり銃殺された日付を暗示している。

さらに第二部の幕をあけるキエフの聖ソフィア教会の詩は、一九一五年に最初の二連が書かれ、グミリョーフの死を知らされてから一九二一年九月十五日に鳴り響く「マゼッパの鐘」が異端の徒の処刑を想わせ川向うの森で仔狐を遊ばせる第三連が書き加えられたという（R. ティメンチク「神の叡智の聖堂」*Slavica Hierosolymitana*, vol.5-6, p.307）。

さらに「塀の下で倒れ／風がとどめをさすまで」という詩は、「N. V. N. の想いでに」という自筆の献辞が一九四十年代に記されていることから、アフマートヴァの詩人としての行く手を指し示したニコライ・ネドヴロヴォに捧げられたものと考えられている。しかしそれより早く一九二一年六月十六日にアンナ・ホダセヴィチのアルバムに第一連が記されているので、続く三連は、グミリョーフの死後の八月三十日に書き加えられたことになる。それゆえこれも密かに死んだ夫に捧げられている可能性があるという（チェルヌィフ『年譜』II, p.26; M. クラーリン『作品集』第一巻, p.397; N.V. カラリョーヴァ編『作品集』第一巻, p.362, p.866）。

この年の秋、「作家の家」でこの詩を読むアフマートヴァの朗読を、人々は、つい最近の処刑の衝撃もさめやらず、格別の感慨をもって聴いたと息子のオレストが父親の伝記で伝えている（オレスト・ヴィソツキィ『息子の見たニコライグミリョーフ』p.298）。

第一部とは逆に、この第二部で語られている出来事の多くはグミリョーフに関係していて、最後の詩だけがシレイコに宛てられている。しかし「記憶の声」と題するこれらの詩群も、一見、先の大戦時の回想とみえて、実は、銃殺の日付が暗示されていたり、死の直後に詩連が書き加えられて名宛人が変ったりしていて、ここでもやはりグミ

リョーフの死が影を落していることがわかる。

しかしその一方で、初版『主の年一九二一年』は、内容はともかく、全体の構成から見れば、この年の春に別れたシレイコに捧げられていると考えることもできる。

この詩集が第一部の新しい時代の予感を告げる詩で始まり、シレイコとの結婚生活と別れが語られて作者と亡きグミリョーフの対話で終る部分と、第二部のキエフの聖ソフィア教会に因む詩で始まり、大戦前後のグミリョーフとの想いでが回想されシレイコとの暮しを振返りつつ別れを告げる部分からなっていて、しかもシレイコ詩群がグミリョーフ詩群をとり囲みながら第一部から第二部へと回顧的に配列され｛S 詩群→ G 詩、G 詩群→ S 詩｝、最後にシレイコに捧げられた印象深い「あなたに従えですって 気でも違ったの！」で締め括られているからである。

つまり詩集の初版は、作者が証言している通り、銃殺されたグミリョーフを追悼して作られながら、構成においてはシレイコに捧げられているかのように装われていると言える。第一次大戦を主題とする第三部を挟んで中心となる人物のグミリョーフ、ネドヴロヴォ、アンレプに捧げる詩で第一部と第二部、第四部が幕をあけ、続く部分の中心人物に捧げる詩で幕が閉じられていた『白い群れ』のように、詩の配置によって、中心人物なりテーマが示されるという構成的手法がここでもみてとれるように思う（木下晴世「飛び去った白鳥たち―アンナ・アフマートヴァ詩集『白い群れ』初版について」『えうゐ』2728 合併号 1995）。

Ⅳ．ベルリン版『主の年』

一年後の一九二二年十月に『主の年』（二版）がベルリンで出版される。ここには初版が出た後の十一月から翌年の秋にかけて新しく書かれた詩が「新しい詩」と題して詩集の第一部に収められ、そのあとに初版の「主の年一九二一年」と「記憶の声」がそのまま第二部、第三部として続く。二版の第一部も初版と同じように年代や日付、献辞の記載は、いずれも二十一篇中、三篇のみにとどまる。

詩集の第一部は一九一九年のペトログラートに捧げられた「同胞に」（「一九二十年」1919 ペトログラート）と題する詩で幕をあけ、続く五編は全てグミリョーフの死を契機として書かれている。

結婚記念日に書かれ、婚礼の冠が荊の冠となる不吉な「見たその金の冠なら」(5/8, 旧暦 4/25) と彼が死んでから訪れた祖母と息子の住む「ベジェツク」のクリスマスの情景（「一九二一年十二月二十六日」旧暦 12/25)、のちに詩群「遠い声」としてまとめ

られ、死んだ夫・恋人の言葉で綴る三篇の詩「お前を 私の天使 騙したわけではない」(12/7)、「遥かなあの年愛が燃え立ったとき」(12/7-8)、「嘘だ お前にかなう女などいないなんて」(11/26) である。

それから彼の異母姉スヴェルチコヴァに捧げられた仮借ない「地上の快楽で心を悩ませず (A. S. スヴェルチコヴァに)」(12 月) がきて、「私は与しない 大地を捨て」(7 月) で亡命者に対する拒否が表明される。

名こそ記されていないが、事情を知るものには革命後の混迷を極めた国内状況のなかで非業の死を遂げたグミリョーフの姿が、この前半部ではっきりと印象づけられる。

それも理由の一つであろうか、国内に持ち込まれる際、この第二版は「同胞に」と「見た 金の冠なら」の掲載頁が検閲でほぼ全部数切り取られて配布されたという (ニーナ・ゴンチャロヴァ『本の運命』2000, M.-SPb., p.231;『手帳』p.378)。

これに対して後半部では夫・恋人との複雑な関係が暗示された「どうして落ち着かずにうろうろするの?」(1921 12 月)、削除された内容からみて亡命した恋人ボリス・アンレプに宛てて書かれたが (旧暦 1918 2/21)、グミリョーフの死後大きく書き換えられた「風そよぐ白鳥のように」(1922)、一九四十年代の書込みから彼の親友アンレプへの愛ゆえに彼女が裏切ったニコライ・ネドヴロヴォに捧げられているとわかる「三年間私を守ってくれた天使は」(1922)、続いて纏わりつく息苦しい愛「囁く『私は悔いてなどいない』」(一九二二年 2 月)、青髭にテーマを借りた「恐ろしい噂が町を徘徊し」(1922 冬)、深い孤独の中で亡き夫と幼い息子を偲ぶ「病気になればいいのに 熱いうわ言のなかで」(1922 春)、秋の宵の禍の予感「湖の向うで月はじっと動かない」(1922) が不安とともに語られる。そうしてヴラディミル・シレイコに捧げられた寓話風の「どうしてまた強く自由なお前が (V. K. シレイコに)」(1922)、旧約のヤコブとラケルの物語「創世記より」(「一九二一年」旧暦 12/25)、息子を亡くしたショーゴレヴァに捧げられた「嘆き歌 (V. A. ショーゴレヴァに)」(1922 5/24)、それからもう一度亡命者と袂を分って「別れ」(1922 秋) を告げたあとに、祖母の形見の「黒い指輪」の物語 (1917 7/20-21) がきてベルリン版第一部は幕を閉じる。

第一部の詩群は、冒頭と終り近くの「同胞に」(「一九二十年」1919 ペトログラート) と「黒い指輪」の物語 (1917) の外は全て、グミリョーフが死んで亡命者が国外退去するまでの一九二一年十一月から翌年の秋に書かれている。それらの詩を前後から挟むようにして、一九二二年五月の「見た その金の冠なら」と「嘆き歌」が、さらにその内側に一九二一年旧暦十二月二十五日の「ベジェツク」と「創世記より」が置かれ、

亡命者に宛てて書かれた一九二二年七月の「私は与しない 大地を捨て」と秋の「別れ」がそれぞれ前半のグミリョーフ詩群と後半の「嘆き歌」のあとに置かれて、制作年代と日付に従って前後に対称的に配列されている。

1919 {5 月、12 月 25 日 win. ← aut. 11 月 26 日} [7 月]
{*win.* → *spr.*12 月 25 日、5 月} [秋] 1917

つまり前半部には一九二一年末の冬から秋にかけて書かれた詩が並び、最後に一九二二年七月の亡命者に宛てて書かれた詩がおかれ、後半部には同じ一九二一年の冬から翌年春にかけて書かれた詩が並んで、最後にやはり亡命者に宛てた一九二二年秋の詩が置かれている。また前半部と後半部の前と後に五月と十二月二十五日に書かれた詩が配置され、それらを前後から包むように一九一九年と一九一七年の詩が置かれるという構成がみえる。ところでグミリョーフ詩群の最後に置かれた詩は一九二一年十一月二十六日に書かれているが、これもやはり旧暦十二月二十五日に書かれた二篇の詩とともに処刑の日付を意識して書かれたものに相違なく、また彼の異母姉アレクサンドラ・スヴェルチコヴァに宛てて書かれた詩もベジェツクを訪れたクリスマスの時期のものと考えられる。八月と九月のみならず、初版が出たあとの十一月と十二月にも「二十五（二十六）日」に詩が書かれていることがこれで分る。このように二版の第一部でも、初版の二つの詩群と同じように、処刑の日付が刻印されている。

しかしその一方でこの第一部の後半では冬から春へと未来に向って詩群が配列されている。初版と同じように息苦しい愛の暮しや恐怖が語られても、作者の心はその辛さや不安からやや遠のき、愛しい人と死んで会える日を待ち、流刑人や死者らと住む家で亡き夫や息子を想い、湖上の月を眺めて綴られる詩には深い孤独と静謐さが感じられる。そうして最終部に到って、創造の辛苦を損なう愛、ラケルを得ようと七年間勤めてレアをあてがわれた旧約のヤコブの物語、聖者や聖母が集って亡き子を弔う「嘆き歌」のような物語風につづられた詩が続いて詩的空間が広がり、それが一九一九年のペトログラートを描いた冒頭の詩へと連なって一つの円環を閉じている。

このようにベルリン版第一部は製作年代と日付に従って冬から秋、夏を経て冬から春へと対称的に詩群が配置され、均整のとれた見事な構造をなしている。そこには血塗られたペトログラートが記念碑となる未来を展望しつつグミリョーフの死を記憶に留め、祖国を捨てた亡命者と袂を分って、未来に立ち向おうとする作者の決意をみてとることができるように思う。そのためであろうか、この二版では初版を蓋っていた秘密を

覗き見するような息苦しさや熱に浮されたような閉塞感、死臭のただよう恐怖が拭い去られ、ひんやりと広い世界が開かれたかのごとき印象をうける。

厳しい検閲にもかかわらずこのような形で詩集『主の年』が公刊できたのは、ひとえに強い意思に支えられた詩人の巧妙な構成的手法の結果であろうと筆者は考える。

しかし、初版『主の年一九二一年』が出て二版『主の年』が作られるまで僅か一年余り、その間にアフマートヴァの暮しは錯綜を極め、一層恐るべきものになっていた。

V.『主の年一九二一年』の前と『主の年』のその後

一九二一年春にシレイコと別れ、フォンタンカ三四番地のシェレメテフの館を出ると、一年前の六月から働いていた農業研究所の職員寮（セルギエフスカヤ七番地）に移る。初版第一部の初めの、夕空に星が瞬き去りゆく旅人に幽閉の辛さを訴える「愛しい旅人よ あなたは遠い」はここで書かれた。

この年の七月「ペトロポリス」の詩の夕べ（十一日）の二日ばかり前にクリミアから戻ったグミリョーフが寮を訪ねて、母や妹の消息を知らせ、兄アンドレイの死を告げるが、これが生きて彼を見る最後となった（『年譜』Ⅱ, p.27-28; パーヴェル・ルクニツキィ『アクミアナ』I, p.44）。

やがて八月十日、スモレンスク墓地でブロークの埋葬に立ち会った際にグミリョーフの逮捕を知る（『手記』p.652）。その後ツァールスコエセローのサナトリウムで処刑決議が承認される会議に出席した労農兵代表ソヴェトの患者の話から彼の処刑を悟ったと彼女は語っている（『アクミアナ』I, p.53）。

新聞発表では、八月三十一日付の『クラースナヤ ガゼータ』178号に「本日八月三十一日午後六時ウリツキィ宮殿にてペトロソヴェト拡大全体会議。当日の議題（1）ペトログラートにおける新たな反革命的陰謀に関する報告…」と書かれ、また九月一日付の『ペトログラーツカヤ プラヴダ』181号に全露チェカー発表の銃殺者のリストが公表されている（『年譜』Ⅱ, p.32）。

しかし先に引用した『アガニョーク』（1990 No.18, p.16）の資料によれば銃殺の決議は八月二十四日のペトログラートチェカー常任委員会で行われているので、作品の日付や発表の時期から考えて、アフマートヴァはそれよりも早く知っていた可能性がある。

というのは初版に先立って早くも九月に『空想家の手記』四号に五編の詩が発表され、最後の二篇が六月と七月、残る三篇は全てツァールスコエ・セロー（のサナトリウム）で八月二十七日から三十日に書かれていて、しかも「恐怖は闇で事物を探りなが

ら」という書き出しではじまる最初の詩には、後代のリストで「八月二十五日」、『時の疾走』手稿で「八月二十七日から二十八日」という日付が記されているからである。(『年譜』Ⅱ, pp.31-34; カラリョーヴァ編『作品集』第一巻 p.357, pp.863-864)。

処刑直後に雑誌発表されたこれらの詩は原・『主の年一九二一年』ともいうべきものであり、『主の年一九二一年』はここからはじまったと言える。

その後一九二二年二月にアフマートヴァは定員削減で農業研究所図書室から免職される。以前から留守中に身を寄せたフォンタンカ十八番地のスデイキナの部屋に移り、そこで当時の音楽コミッサールで作曲家のアルトゥール・ルリエと三人で暮しはじめる。

しかし半年後の秋にはルリエも出国して亡命してしまう。ベルリン版『主の年』第一部を締め括る「別れ」は彼に宛てて書かれた。革命後の混乱と飢餓のなか、職もなく、家もない暮し。

「死刑、流刑、死、飢餓、お金もなく、家もない新しい現実。

世界は虚ろになり、作品だけが残った。ある者はネドヴロヴォやブロークのように亡くなり、グミリョーフのように滅びて、また幾つもの詩を捧げたアンレプや四十年を経ても生々しい感情のしみ込んだ詩が書かれたルリエのように去った。残された者は憔悴させる難問や恐怖の重荷を負って転々としている。家はもうなく、家族もない。息子は別の町の祖母のもとに。愛は幽閉となり、寄る辺なさ、二つの家を往来する放浪、愛する人の最初の家族と一つ家に住まう流れ者の暮しとなった。」(ニーナ・ゴンチャロヴァ「アンナ・アフマートヴァ 肖像のスケッチ Ⅱ」『本の運命』p.39.)

こんなときアフマートヴァの前に現れたのがルリエの友人でもう一人のコミッサール、美学者のニコライ・プーニンであった。彼はグミリョーフと同じ八月三日に逮捕されたが、グミリョーフが銃殺されて間もない九月六日に釈放されている。

一九二四年十月にルリエが去ってから身を寄せていたスデイキナが亡命すると、別れたシレイコの住いの大理石の館とプーニンの住むフォンタン館を往来して暮すようになる。

二年後の一九二六年六月、シレイコとも正式離婚の手続きが整い、以後、三十年間にわたるフォンタン館での暮しがはじまる。そこにはニコライ・プーニンが家族と暮していた。彼のアルヒーフで最近、アフマートヴァの手で書かれ「新しい詩 一九二二年」と題する小さな手製の手帳が見つかった。そこにはベルリン版の第一部がほぼそのままの形で再現され、手帳でも詩集の二版でももっとも遅く「一九二二年秋」に書かれた「別れ」のあとに、もう三篇の詩が記されていた。

のちに「多くの人に」と呼ばれる詩の結びとなる「人は言う ぴったり結びついてはならぬと／取り返しのつかぬほど愛してはならぬと…」(9/14)、暗い秘密にみちた「悪魔は裏切らなかった…」(9月)、運河の水がエメラルド色にきらめき蕁麻が薔薇のように匂う奇蹟のような秋の日の出逢いを綴った「見たこともない秋が高い円屋根の塔を立て」(9月) である。

暗い不思議な魅力をたたえたこれらの詩はいずれもプーニンに捧げられ、彼との関係が深まる中で書かれ、彼に捧げられている。とりわけ最初の詩に記された「九月十四日」は自分たちの「記念日」としてふたりが認めている日付だという (N. プーニン『愛で明るむ世界。日記・手紙』2000 SPb., 編者 L. ズィコフの注 pp.475-476)。

これはベルリン版『主の年』に続いて作られ、愛するプーニンに捧げられたもう一つの詩集であった。しかしこの詩集が完成されることはなかった。一九二四年四月にモスクワで「新年のバラード」を朗読して、その後一九三九年まで十五年間、党中央委員会決定により印刷発表が差し止められたからである。

新年のバラード

月は雲靄の中からわびしげに
おぼろな目差を室内にそそいだ
そこは六客の食器がテーブルにならび
一客分だけ空だった

これは私の夫と私と私の友人が
新年を迎えようとしているところ
なぜこの指は血に染まってみえ
葡萄酒は毒さながら燃えるのか？

主人は満たされた杯をかかげ
重々しく身じろぎもせず
「私は飲もう ふるさとの草地の大地のために
私たちが皆そこに身を横たえた！」

友人は私の顔を見つめ

何ごとか思い出して
声をあげた 「私は彼女の歌のために
私たち皆そのなかで生きている！」

けれど三人目は何も知らぬまま
この世を捨てたとき
私の想いに答えて
言った 「私たちは飲み干さねばならぬ
いまだ私たちと共にないもののために」

一九二二年の年末

『現代ロシア人』一九二四年第一号（五月）

参考文献

1) Anna Akhmatova. *Stikhotvoreniya i poemy.* Sostavlenie i podgotovka teksta i primechaniya V. M. Zhirmunskogo. L., 1976. (Biblioteka poeta. Bol'shaya seriya)
2) Anna Akhmatova. *Sochineniya v 2 t.* Sostavlenie i podgotovka teksta M. M. Kralina. M., 1990. (Biblioteka <Ogonek>).
3) Anna Akhmatova. *Sobranie sochinenii v 6 t.* Sostavlenie, podgotovka teksta, kommentarii, stat'ya N. V. Korolevoi. M., 1998-2000. t. I-IV.
4) *Zapisnye knizhki Anny Akhmatovoi (1958-1966).* Moskva-Torino, 1996.
5) Chernykh V. A. *Letopis' zhizni i tvorchestva Anny Akhmatovoi.* M., 1998. ch. II.
6) Luknitskii, P. N. *Acumiana. Vsterchi s Annoi Akhmatovoi.* t. I. 1924-1925 gg. Paris, 1991.
7) Chukovskii K. I. *Dnevnik. 1901-1929.* M., 1991.
8) Punin N. *Mir svetel lyubov'yu. Dnevniki. Pis'ma.* Sostavlenie, predislovie i kommentarii L. A. Zykova. SPb., 2000.

9) Visotskii O. *Nikolai Gumilev glazami syna.* M., 2004.

10) Goncharova N. *"Faty Libelei" Anny Akhmatovoi.* M.-SPb., 2000.

11) Khlebnikov O. "Shaglenevye pereplety", Ogonek, 1990 No.18, pp.13-16.

12) Timenchik R. D. "Khram premudrosti Boga: Stikhotvorenie Anny Akhmatovoi "Shiroko raspakhnuty vorota…"", *Slavica Hierosolymitana*, vol.5-6, pp.297-317.

13) Timenchik R. D. i Lavrov, A. V. "Materialy A. A. Akhmatovoi v rukopisnom otdela Pushkinskogo doma", it Ezhegodnik rukopisnogo otdela Pushkinskogo doma na 1974, L., 1976, pp.297-317.

14) 武藤洋二『詩(うた)の運命–アフマートヴァと民衆の受難史』新樹社 1989.

15) 木下晴世「飛び去った白鳥たち—アンナ・アフマートヴァ詩集『白い群れ』初版について」『えうゐ』27・28 合併号 1995.

16)『アフマートヴァ詩集　白い群れ 主の年』木下晴世訳 群像社 2003.

1 Novye stikhi V te basnoslovnye goda··· Tyutchev

BP	SSK	掲載頁	表題	日付1	日付2	典拠	人物	初出
238	348	7	Sograzhdanam	1920	1919 Petrograd	AD2/rBV		AD2
240	386	8	Videl ya tot venets zlatokovannyi···		1922.(4.25)5.8	BP	Gumilev	AD2
239	377	9	Bezhetsk	1921.dek. 26	1921. 12.25 (1.7) st.	dil	L.Gumilev	Zavtra, Berlin, 1923
241	373	10	Ya s toboi, moi angel, ne lukavil···	Dal'nii golos	1921.12.7 Pet.	BP	Gumilev	Liricheskii krug, 1922
242	374	11	V tot davnii god, kogda zazhgklas' lyubov	Dal'nii golos	1921.12.7–8 Pet.	BP	Gumilev	Peteruburgskii sbornik, 1922<3–4?>
243	370	12	Nepravda, u tebya copenits net···	Dal'nii golos	1921. 11.26	dil	Gumilev	Peterburg, 1921(1)<12>
244	379	13	Zemnoi otradoi serdtsa ne tomi···	A.S.Sverchkova	1921.12	dil		Utrennii,1,1922<4–5?> Nakanune,<4/30>
245	389	14	Ne stemi ya , kto brosil zemlyu···		1922.7 Pet.	dil		AD2
252	380	15	Chto ty brodish', neprikayannyi		1921.12 Pet.	BP		Severnoe utro, 1, 1922<5–6?>
253	325	16	Veet veter lebedinnyi···		1918.2.21(3.6)–1922	SZ–BV	Anrep–Gum	Sbovodnyi zhurnal, 1918(3–4)
254	382	17	Angel, tri goda khranivshii menya···		1921?/1922	dil	Nedobrovo	AD2
255	385	18	Shepchet: "Ya ne pozhaleyu..."	1922	1922.2.	dil		Moskva, 1922(6)
256	384	19	Slukh chudovishnii brodit po gorodu···		1922.1–2/Win.	dil		Lit. mysl', 2, 1923<3–4?>
257	388	20	Zabolet' by kak sleduet, zhguchem bredu···		1922 Spr.	dil	Gumilev	AD2
258	399	21	Za ozerom luna ostanovilas'···		1922	BP		Abraksas, 1, 1922<9–10?>
259	398	22	Kak mog ty, sil'nyi i svobodnyi···	V.K. Shileiko	1921/1922	P/BP		Parfenon,1,1922<4–5?> Nakanune,<4/30>
260	375	23–24	Iz Knigi Bytiya.	1921	1921. 12.25 (1.7) st.	dil		Strelts, 3, 1922<6–7?>
263	387	25	Prichtanie.	V.A.Shegoleva	1922.5.21/24 Pet.	/BP		AD2
264	394	26	Razluka(<Vot i bereg severnogo morya···>)		1922 Aut.	dil	Lur'e	Svirel' Pana, 1923(21)
		27–28	Dva otrybka iz <Skazka o chernom kol'tse>					
266	305		I. Mne ot babushki–tatarki···		1917.7.20–21 Slepnevo			AD2
266	306		II. Ya druz'yam moim skazala···		1917.7.20–21 Slepnevo			AD2

ANNO DOMINI MCMXXI 1921.11.15–12.1 (AD1)

2 Anno Domini MCMXXI Nec sine te, nec tecum/ Vivere possum.

268	351	7	Vse raskhishcheno, predano, prodano···	N.Rykova 192	1921.6/7	dil		AD1
269	349	8–9	Putnik milyi, ty daleche···.	1921.6.22	1921.6.22(7.5) st. Sergiev	dil		Zapiski mechtatelei, 1921(4)<3> ⑤
270	354	10	Sosluzhu tebe vernuyu sluzhbu···	1921	1921.7	BP	Shileiko	AD1
271	350	11	Nam vstrechi net. My v raznykh stanakh	1921	1921.6	BP		AD1
272	357	12–13	Ctrakh, vo t'me perebiraya veshchi···	1921	1921 .8.25 /'27–28 TsS	RNB/rBV	Gumilev	Zapiski mechtatelei, 1921(4)<3> ①
274	360	14–15	O, zhizn' vez zavtrashnego dnya!...	1921	1921.8.29 TsS	dil	Shileiko	AD1
275	361	16–17	Koe–kak udalos' razluchit'sya···	1921	1921.8.29 TsS	BO	Shileiko	Zapiski mechtatelei, 1921(4)<3> ③
276	353	18–19	A, ty dumal – ya tozhe takaya···	1921	1921.7 Fontanka/Pg/TsS	dil	Shileiko	Zapiski mechtatelei, 1921(4)<3> ④
271	364	21–22	Pust' golosa organa snova gryanut···	1921	1921.8 TsS	RNB	Shileiko	AD1
278	358	22–23	Chugunnaya ograda···	1921	1921.8.27 TsS	dil	Gumilev	AD1
279	363	24–25	A Smolenskaya nynche imeninnitsa···	1921	1921.8<(7.28)8.10>	dil	Blok	Byulleten' Doma iskusstv, Berlin, 1922
280	359	26	Prorochish', gor'kaya, i ruki uronila···	O.A.G.S. 1921	1921.8.27 TsS	dil	O.Sudeikin	AD1
284	369	27	Ya gibel' naklikala milym···	1921	1921.10 Pet.	dil		AD1
285	368	28	Dolgim vzglyadom tvoim istomlennaya···	1921	1921. 9.25	dil	Gumilev	AD1

3 Golos Pamyati Mir lish' luch ot lika druga, Vse inoe ten' ego. N. Gumilev

287	366	31	Shiroko raspakhnuty vorota	1921	1915–1921.9.15 TsS	RGALI/dil		AD1
288	272	32–33	Pochernel, iskrivilsya brevenchatyi most···		1916 Sum./1917/1918	dil/BP/24–26		Mysl', 1918(1)
289	248	34–35	Tot avgust, kak zheltoe plamya···		1915	dil	Gumilev	Birzhevye vedomosti, 1915 12/20
290	331	36	Vstrecha.	1919	1919 Win.	dil		AD1
281	355	37	Ne bybat' tebe v zhivykh···	1914	1921.8.16(29) st. TsS–P	dil	Gumilev	AD1
294	251	38	Kolybel'naya.		1915	dil	L.Gumilev	AD1
282	362	40–41	Poka ne svalyus' pod zaborom···	1921	1921.6.16–8.30 TsS	– dil	N.V.N.–Gum	Zapiski mechtatelei, 1921(4)<9> ②
283	352	42	Na poroge belom raya···	1921	1921.7/7.28	dil/24–26	Nedobrovo	AD1
295	367	43	Zaplakannaya osen', kak vdova···	1921	1921.9.15 TsS	dil	Gumilev	AD1
292	292	44	Soblazna ne bylo. Soblazn v tishi zhivet···		1917.1	dil		AD1
296	271	45–46	Budu chernuye glyadki kholit'		1916 Sum. Slepnevo	dil		AD1
273	254	47	Ty mne ne obeshchan ni zhizn'yu, ni Bog	1915	1915			Al'manakh muz, 1916<3>
630	218	48–49	I. Pokinuv roshchi podiny svyashchennoi···		1913 Aut.	BP		AD1
631	220	50	II. Smerkaetsya, i v nebe temno–sinem···		1914–1916	BV		AD1
251	365	52	Tebe pokornoi? Ty soshel s uma!	1921	1921.8 TsS	dil	Shileiko	AD1